

<論文>

パールとゲンシー ——バリにおける資金集め活動と消費モダニズム——

Bar and Gengsi :

Fund-raising and Consumerist Modernism in Bali, Indonesia

中野 麻衣子*

要旨

国際観光産業の飛躍的な発展により社会全体が急速に富裕化する中で、内部の経済的な階層格差が広がる今日のバリでは、「ゲンシー」と呼ばれる顕示的消費を特徴とし、バリ人のイーミックな「モダン」概念に基づく社会的競争が顕著になっている。ゲンシーによる社会内部の消費的競争はとりわけヒンドゥー的儀礼の文脈で過熱しているが、本稿では、同じくゲンシーの舞台である「パール」という資金集めの活動を取り上げ、このバリ人の消費主義的モダニズムの由来や方向性を考察する。本稿の主軸はパールの記述にあるが、同時にそれを通して、今日のバリ社会を席卷しているゲンシーが、スハルト体制下に開花したインドネシア版モダニズムのバリ版であることを示唆する。

キーワード：資金集め (fund-raising)、開発、顕示的消費、パール、ゲンシー、モデルン、モダニズム、バリ、インドネシア

目次

- I はじめに
- II カフェの開催による資金集め
- III 「開発」精神とパールの発展
- IV 顕示的消費の舞台としてのパール
 - パールとカフェ：外延にあるジャカルタ発のモダニズム
- V モダンの窓口としてのパール
 - 新しいバリ意識と花開く消費文化
- VI 肥大する消費、減退する共同労働
- VII 結び

I はじめに

* 一橋大学大学院社会学研究科博士後期課程

インドネシアのバリ社会には、「バール *bar*」と呼ばれる独特の資金集め *penggalian dana* の方法がある¹。簡単に言えば、飲酒・飲食の場としての模擬店をバリ社会の内部に向けて開催し、利益を得るという方法である。バールの起源はオランダ植民地時代まで遡ることもできるが、独立後、特にスハルト政権下の開発体制の中で、テレビやガムラン楽器といった共有財の購入、集会所や寺院の再建・改修のための資金を獲得する手段として、バリの村々の様々な社会組織が採用し、近年一層活発化してきた活動である。本稿の目的は、これまで研究対象として注目されることのなかったこのバールについて記述し、その全容を明らかにするとともに、そこに見られる今日のバリ社会が志向する消費主義の性格やその方向性について考察することである。

近年のバリにおける国際観光産業の一層の発展がバリ経済全体の富裕化をもたらす中で、バリ社会は消費社会へと急速に発展している。観光産業がもたらした富は、バリの人々の間で不均等に配分され、社会内部の経済的な階層格差を広げてきた。その中で、「ゲンシー *gengsi*」と呼ばれる豊かさを顕示する競争的な消費行動が、今日のバリ社会を特徴づける社会現象となっている。ゲンシーは、新興富裕層といった特定の階層に限って見られるわけではない。とりわけ飛躍的な経済発展を遂げた南部の都市や村落では、収入規模を問わず幅広い社会層を巻き込んだ熾烈な顕示的消費競争が展開している。

顕示的消費の対象となっているものは、バリ人が自ら定義する「モデルン *moderen*」、つまり「進んだ、豊かな、モダンな」ものであり、したがって、ゲンシーはバリ人のモデルン志向、つまりイーミックな意味づけにおけるモダニズムと見なし得る。ゲンシーは今日のバリ人の社会生活のあらゆる場面で観察され、特に寺院の祭礼をはじめとする諸儀礼はゲンシーによる競争的消費が過熱する舞台となっている。バールもまた、その一つの典型的な舞台である。

社会的競争は、個人間のレベルにとどまらず、地域集団や寺院集団といった社会集団のレベルでも起こっている。とりわけそれは、諸社会集団が自ら所有し管理する集会所や寺院などの建物の高級化を図った改築ブームに端的に見て取れる。その中で、諸集団が資金獲得の手段として行うバールもかつてない頻度と規模で行われているのである。そして、バールによる資金集めが確実に目標を達成するのは、人々のゲンシーによる競争的な消費欲望を掻き立てる顧客戦略が容易だからである。

バールにおいては常に、バリ人たちが時代の先端を行くと考える飲食物や娯楽が提供さ

¹ 今日のバリ社会はバイリンガルであり、バリ語で話している場合でも、インドネシア語由来の単語や表現が混在する。この状況では、個々の表現について「厳密に」言語的帰属を識別しようとしても、それは語源を明示する以上の意味はない。したがって本稿では、バリ人たちが日常語として使っている表現を文中に記す場合は、バリ語・インドネシア語を区別せずに、イタリック体で表記する。ただし、中には明らかにインドネシア語であることを意識した言い回しもあるので、そのような場合にのみ、インドネシア語であることを明示する意味で、(i.)をつける。

れ、それに対するバリ人たちの消費欲望が資金集めの活動としてのバールを支え、発展させてきた。そこには、村落に住むバリ人の消費におけるモデルン志向が鮮明な形で現れている。本稿では、資金集めとしてのバールの実践形態や発展の背景と経緯、バールでの消費の様相、消費物の内容、そして最近の変化を詳細に記述・検討する。バールに投入される常に最新の消費財を追究すれば、今日バリ人がゲンシーによる消費生活で表現しているモデルン志向とインドネシアの消費文化との関係が見えてこよう²。

II カフェの開催による資金集め

村の下位単位である集落組織バンジャール *banjar* や寺院の信徒集団 *pemaksan* をはじめとする在来の社会集団は、資金集めのために、1970年代以降、稲刈りの共同作業に代わってバールを盛んに行うようになった。バンジャールはその集会所 *bale banjar* に、寺院集団は寺院の境内に、臨時の飲食店を作り、同村内の住民だけでなく、近隣の村々に住む知人や友人、職場の同僚などできるだけ多くの人を招き、通常の5割から10割増しの値段で飲食してもらうことによって収益を得る。バールを開く、またはバールに赴くことは「善行、慈善 *ngamal*」という概念で語られ、バールでの消費行為は名目上、「寄付 *madana punia*」と見なされる。現在では事前に飲食券となるクーポン *kupon, vocer, kuin* を売り、その売り上げ収入を元手にバール本体の準備を行っている。クーポンの購入は、頼まれると通常は断れない。バールの客となるのは、このようにして事前に招待された人々、即ち主催集団内部の個々人に連なる関係者であり、招待された者は友人や家族などを同伴して来る。つまりバールは、バリの狭い社会の内部で行われる活動であり、それゆえ面子や名誉が関わる舞台となる。目標とする集金額にもよるが、3夜から5夜、通常は4夜、連日夜7時頃から深夜まで開催される。バールはまた、近年ではインドネシア語で「バザール *bazar*」とも呼ばれ、この語の方がよりフォーマルな名称として採用されている³。バリ社会全体の消費水準が格段に高まる中で、特に豊かな南部の村々では、ほとんど連休があるたびに村のどこかの集団がこのバール（バザール）を開催している⁴。それゆえ交際の広い人は、休みが近づくと方々からクーポンを買わされることになる。

現在のバールの会場では、ロックなど、大声で叫ばなければ話もできないほど大音量の

² 本稿が依拠する現地調査は、平成14-15年度文科省科学研究費補助金（特別研究員奨励費）、（財）松下国際財団1998年度松下アジアスカラシップ、（財）大和銀行アジア・オセアニア財団平成10-11年度国際交流活動助成の資金援助を得て実施した。記して感謝したい。

³ 1988年のP行政村の報告書では、すでにバザールという語がバールとともに用いられている[Desa P. 1988]。しかしそれが人々の間に普及したのは、1990年代後半以降である。

⁴ 通常バンジャールや寺院は、会場のテーブルに用いる机や椅子を近くの学校から借りるため、開催は学校が休みになるのを待たねばならないが、今ではガルンガン *Galungan* やニュピ *Nyepi* といったそれぞれバリ・ヒンドゥーの「盆」「新年」にあたる大祭だけでなく、学年末の休みの時期（6月半ばから7月半ば）、西暦での年末年始、クリスマスやイスラムの祭日が重なる時などにも開催する。

「激しい音楽 *musik keras*」が流れる中で、集まった人の多くは専ら飲酒を楽しんでいる。薄暗い会場は、黒い布などで壁が覆われ、色とりどりの電球や、タバコやビールのロゴが入った垂れ幕やポスターなどで飾り付けられている。各テーブルにはチェック柄などの布がかけられ、花を生けた花瓶と蝋燭、メニューが置いてある。メニューといっても品数は少なく、食べ物と飲み物とタバコのリストが一枚の紙に印刷されているだけである。ここで料理をつまみながら、冷えていないビールをひたすら飲み続けるというのが、バール客の典型的な姿である。夜 9 時、10 時を回る頃にはテーブルの上にビール瓶が林立し、会場は大変な熱気に包まれる。一角にはステージが設けられ、最近では借りてきた大型スピーカーから音楽を流すだけでなく、バンドの生演奏も入る。演奏するのは通常、地元の素人バンドだが、時にはプロを雇うこともある。演奏のある日はメニューの値段もさらに上がる。深夜を過ぎる頃には、若者たちがステージに上がってミラーボールの下で踊りまくるディスコ *disko* と化する。ビデオ CD が急速に普及した 1990 年代末からは、カラオケ *karaoke* もお決まりのイベントとなっている⁵。

バールは若者が主役の活動として発展・定着してきたものでもあり、夫婦を成員とするバンジャールが開催する場合も、会場の装飾や当日の給仕、接客などの仕事は伝統的に、その下に組織された青年団が行ってきた⁶。青年男子は儀礼時に着用する慣習衣装 *pakaian adat* を着てウェイトーに扮し、女子もきれいに慣習衣装に身を包み、各テーブルに一人ずつ座って客をもてなすホステスに扮する⁷。したがってバールの主要な客は 20 代、30 代の若年層、特に男性である。若者にとってバールは公然と夜遊びでき、異性と出会い歓談できるエキサイティングな機会なのである。娯楽が今ほどなかった時代にはとりわけそうであったという。実際、バールで出会い、結婚したという夫婦も少なくない。

とはいえ、バールは若者だけの場ではない。開店直後から夜 9 時頃までの早い時間帯には、年配者や子供連れの主婦たちも来場する。バールは公共の利益のために行われる催しであり、自分が属するバンジャールや寺院、村が開催しているとなれば、一度は足を運ばなければ面目がたたないのである。この時間帯にはまた、主催集団が正式な文書をもって招待した賓客、つまり地元の諸組織の代表や名士たち——郡長や行政村、慣習村の長、各バンジャール、各青年団、各寺院の役員、そして旧貴族（領主家）の代表や成功している

⁵ 最後には、泥酔した若者がビール瓶を投げ割る喧嘩騒動を起こすこともしばしばである。

⁶ 従来「プムダ・プムディ *pemuda-pemudi*」と呼ばれてきたバンジャールの青年団は、インドネシア独立後、1960 年代半ばから、特に 1965 年の共産党事件 G30S / Gestapu を頂点とする政治的混乱の後、次第に組織されるようになったものと言われる。しかし、地域によっては活動も組織も不明瞭であった。1980 年代以降、バリ州政府の文化政策により慣習組織の整備・改革が進む中で、青年団も新たにバリ語の名称 (*seka teruna-teruni*) の下に、各バンジャールに、独自の成文法を持つ明確な組織として、画一的に組織させる方針が採られた[cf. 鏡味 2000: 125]。一般に 17 歳以上の未婚男女が成員資格となっている。

⁷ かつては、いわゆる慣習衣装を着用していたのは女子だけであった。男子も慣習衣装を着用するようになったのは 1980 年代以降である。

起業家（アートショップのオーナー）など——も訪れる。

バリを含む現在のインドネシアでは、飲酒のための店は「カフェ *kafe*」と呼ばれている。したがってインドネシア風に言えば、バールは、資金集めのためのカフェの開催である⁸。バリ外部から来たインドネシア人は皆、バリのバザールが「カフェ」であることを知って驚いたと言う。慈善活動としての意味合いを持つバザールという寄付金集めの活動はインドネシア各地にあるが、バリのバールのようなやり方は他地域には例がないという。敬虔なイスラム教徒ないしキリスト教徒にとって、飲酒とチャリティーが結び付くことは奇異であり、また、普通より高い値段に設定されていることにも違和感を覚えるという⁹。つまりバールは、インドネシアの中でも珍しい、バリに独特の活動なのである。

いかにも国際的観光地としてのバリならではの現代的な慣習に見えるこのバールではあるが、実のところ、これは外来観光客から直接の影響を受けて発展してきたものではない。むしろバールは、インドネシア国家の影響力が浸透してくる中で支配的になった近代化の言説、即ち「開発 *pembangunan*」言説に、バリ人たちが熱狂的に参加していく過程で自生的に成立・発展してきたものである。

III 「開発」精神とバールの発展

バールが発展した背景として、スハルト「新秩序 *Orde Baru*」体制下の開発事業がある。政府の援助金などに頼らずに、草の根の住民が自ら資金を工面し、学校の建設や道路の舗装といった「開発」事業を遂行していくことは、インドネシアでは「スワダヤ *swadaya*」（自助）と呼ばれる。特に 1970 年代後半以降、スハルト政権による開発の強調が地方や村落に浸透していく過程で、「スワダヤ」は「ゴトン・ロヨン *gotong-royong*」（相互扶助）とともに高い価値が置かれた¹⁰。バールという活動は今日でも、このスワダヤという概念と結び付けられ、常にバリ住民の主體的な「開発」精神を象徴するものとして語られる¹¹。つまり、バリ人にとって、バールはインドネシアでの優等生ぶりを証明するバリ独自の慣習として位置づけられるのである。

インドネシア研究では従来、スハルト政権下で推進された村落開発・近代化政策といえ

⁸ ただし、バリ人自身は自分たちの行うバールが「カフェ」と呼ばれることには戸惑いを見せる。今日のバリ人にとって「カフェ」という言葉は、一方でジャカルタの富裕層に代表される都会的なライフスタイルを想起させるが、他方で「カラオケ」や「ディスコ」とともに常に麻薬や売春といった闇の世界をも連想させる言葉だからである。

⁹ たとえば、このように述べた一人である、バリ村落で飲食店を営む中部ジャワ出身者によれば、彼の地元サラティガでは、バザールといえ、地域の共同体の住民が学校の校庭などを借りて、手作りの小物や菓子などを普通の店より安く売って資金を集めることだという。

¹⁰ 村落開発の文脈では、村内で進められた「開発」事業のうち、どのくらいがスワダヤ（による資金）によるものであるかは、その村の「開発度 *tingkat pembangunan*」を測る公的な基準であり、1969 年以降ジャワを皮切りに政府が行ってきた、後述の「村落コンテスト *Lomba Desa*」では常に重要な評価項目となってきた。

¹¹ 実際、村の報告書などでは、「開発バール *bar pembangunan*」という表現も見かける。

ば、威圧的で悪意に満ちた強い国家の勢力によって善良な市民の上に押し付けられるものとして表象されるのが常であった。これに対し、1980年からバリの中でも周辺の村落で調査したパーカーは、政府の実施した様々な開発プログラムを、村民自身は決して抑圧や教化としては経験していなかったという新しい見方を提出している[Parker 2003]。彼女が捉えたのは、旧来のローカルな支配関係の強く残る貧困村落の住民が自ら開発を望み、進んで国民国家に参入していった姿である。村民の多くは、政府の描いた物質的な豊かさへと導く「開発」のヴィジョンを、むしろ至福千年説的な見方で受け止め、熱狂的に受容していったという[Parker 2003: 121-155]。

パーカーの調査村が1990年代前半に国家規準により開発の最も遅れた「取り残された村 *Desa Tertinggal*」に指定された村であるのに対し、筆者の調査村であるギアニヤール県ウブド郡のP村は、1980年代には開発度の最も高い「自立達成村 *Desa Swasembada*」に認定された村であり、開発を熱狂的に受容したバリ村落の顕著な例と言える。政府が毎年開催する、開発への取り組みを村単位で競わせる「村落コンテスト」には、1981年の初参加以来これまでに4回参加しており¹²、新秩序政府の目指した近代化に対する村民の意気込みは当初から極めて高かった¹³。

その背景には、「豊かな楽園バリ」という観光イメージとは裏腹に、インドネシア随一の観光地として一躍発展するまで、バリ人の生活は概して極めて困窮したものであったという事実がある。開発の進んだ1987年の時点でさえ、バリの貧困率は40%であった[Parker 2003: 13]。少なくとも現在のバリ人の視点から見れば、優に1970年代まで人々は非常に貧しく、無知で、不衛生な生活をしてきた。白い飯などめったに食べられず、日々、干イモ混じりの褐色の飯 *nasi cacah* を食べ、肉は「半年に一度」——つまり210日毎のガルンガンの大祭の時——しかありつけなかった。新生児は「5人に1人くらいしか」生き延びず、電気もなく夜は真っ暗で、赤子を食べる妖術師レヤック *leak* の妖術に怯えていた。これが今日のバリ人が、現在の「モデルン」（進んだ、豊かな）の世界と対比させ、回顧的に語る「クノ *kuno*」（遅れた、貧しい）の世界である。当時のバリは、インドネシア中央のまなざしから見れば「遅れた」周辺世界にすぎず、「バリは汚い」というイメージが共有されていたという[McKean 1973: 162]¹⁴。

¹² 成績は、1981年が州3位、1988年が県1位、1996年が州3位、そして2003年に初めて念願の州での優勝を果たした。また、バリでは1983年以来、慣習組織の維持・振興を目的とする、州政府開催の慣習組織のコンテストも行われているが[鏡味 2000]、P村は1994年に「慣習村コンテスト *Lomba Desa Adat*」及び「青年団コンテスト *Lomba Seka Teruna*」に郡代表として参加し、そこではともに州1位を獲得している。

¹³ 1970年代、80年代に開発への住民参加のイニシアティブをとった村の役員やバンジャールの長などは皆、当時の村民の開発への意欲は「尋常ではなかった」と強調する。

¹⁴ 1970年代初めに現地調査を行ったマッキーンは、当時バリの観光産業を支配していた非バリ人、特にジャカルタから来たジャワ人は、地元のバリ人と交わるのを嫌っていたと述べている。外部のインドネシア人から見たバリは、供物のゴミが散らかり、イスラム教徒の嫌忌する

このような中で、1970年代以降、中央からの進歩の言説が浸透すればするほど、また開発が進めば進むほど、人々は無知と遅れとを自覚していくことになった。1981年の村落コンテスト参加時にP村の人々が力を入れたのは、全屋敷に（コンクリートの）トイレと豚囲いを建設する事業であった。当時P村では80%の屋敷にトイレがなく、人々は屋敷の後方の土地 *teba* で用を足し、豚は囲われることなく屋敷の中を徘徊し、糞便を撒き散らしていた。そこで、各バンジャールで資金を積み立て、貧しい屋敷には安価な簡易便器を用意し、必死の努力で全屋敷にトイレを普及させた。結果、県では優勝し、村民は一旦狂喜したものの、州のレベルでは惜しくも3位に終わった。この悔しさをばねに、村民は一層熱心に開発事業に取り組み、村のインフラはみるみるうちに整備されていったのである。

インドネシア語で言う「開発」、即ち「プンバングナン *pembangunan*」は、文字通りには「建設」を意味する。バリの人々にとって「開発」といえば「建物 *bangunan*」（煉瓦やコンクリートを使った建造物）を建てることであり、村の進歩は新築ないし改築された建物のリストで代表される。「進歩 *kemajuan*」とはこのように物質的な観点から測り得る発展を意味し¹⁵、「建設」即ち「開発」と、「進歩」とは、相互に互換可能な言葉であった[cf. Parker 2003: 122]。このような「開発」の理解はインドネシア各地で見られるものであり、ジャワについては1970年代初期から、村民が盛んにコンクリートの塀や門を建設していく様子が観察されている[eg. アンダーソン 1995; 関本 1986; Sekimoto 1997]¹⁶。

バリでも特に1970年代から80年代の間に、土、竹、草でできていたバンジャールの集会所や寺院は競争的に焼煉瓦やコンクリートを使った建造物に建て替えられ[cf. Warren 1993: 168]、個々の屋敷のレベルでも宮廷の門を模した煉瓦造りの屋敷門 *angkul-angkul* が、進歩を象徴するものとして競って建設され、村落の外観は一変したのである。そしてそこに働いていたのは、ジャワで看取されたものと平行する「進歩」の思考であった。P

豚が徘徊し、土の道路や床は雨季にはぬかるみ泥だらけになる、「汚い」ところであった[McKean 1973: 162]。後述するように、現在ではインドネシアにおけるバリのイメージはむしろ逆転している。現在のバリ人は、かつてバリを「汚い *kotor*」と見なしたのと同じ進歩観によって外来のインドネシア人——「ジャワ人 *Nak Jawa*」と侮蔑的に呼ぶ——を見下している。関本は、「清潔 *bersih*」という概念は、新秩序国家成立後に流布した特有の進歩の観念であると論じている[Sekimoto 1997: 334-336]。

¹⁵ 「進歩 *kemajuan*」の動詞形・形容詞形 *maju*（進歩する、進歩した）も頻繁に使われる。

¹⁶ 関本によれば、ジャワの村民は、政府の手で組織された村同士の建設競争という儀礼に動員され、熱中していく中で、国家の示す進歩のイデオロギーを、「割竹を編んだパネルでこしらえた外壁や、草を編んだ屋根はクノ（時代遅れ）であり、煉瓦づくりの壁、瓦ぶきの屋根はマジュ（進歩）である」[関本 1986: 61]という思考の延長上で比較的容易に受け入れたという。その結果1980年までに、家ごとにばらばらだった竹垣や塀は一樣な構築物に置き換えられ、村は人工的・物質的な外観——新秩序国家が求める「秩序」の画一的な景観[Sekimoto 1997]——に一新したという。

村で1970年代半ばから「村落開発委員会 LKMD」¹⁷の一員として尽力した元教師は、「我々村民は進歩 *maju* したかったのだ！」と当時を振り返ったが、1974年の時点でP村には学校の「建物」がまだないことを彼は恥じ、憤りを感じたという。そこで、奮起して政府の援助金 *Inpres* を獲得し、初めて「建物」たる校舎を建設したが、床は単なるセメントではなく、タイルを敷き、彼曰く、これによりP村は政府の役人たちにも賞賛された。つまり、タイル敷きの建物により、P村は一気に他村を超えたというのである。このように村人たちの「開発」は、土や竹材よりも煉瓦やコンクリート、あるいはセメントの床よりもタイル敷きの床を進歩とする思考に基づいていた。そしてこのようなコンクリートや煉瓦を「進歩」とする「開発＝建設」事業に村民が自力で取り組むにあたっては、今までとは比較にならないほどの資金と労力が必要となった。

バールという活動は、このように新秩序体制下のインドネシアで起こった建設競争にバリ村民が自ら主体的に参加していく中で、とりわけ村落社会における最も基礎的な組織であるバンジャールが、1970年代以降、「開発費」を調達する手段として積極的に行うようになったものである。かつてはバンジャールや寺院といった慣習組織は、内部で大きな資金が必要な時には、成員総出で稲刈り *manyi* 労働を請け負うことによって現金を工面していた¹⁸。しかし、1970年代に入るとこの稲刈りの共同作業はすっかり行われなくなり¹⁹、代わって一般化・制度化してきた資金集めの方法が、バール即ち飲食店の開催であった。もちろん、慣習組織が「開発」資金調達のために採用した方法は他にも様々にあり²⁰、中

¹⁷ 訳語は島上[2001]を参照した。LKMD=Lembaga Ketahanan Masyarakat Desa は字義により忠実に訳せば「村落社会維持強化機構」となるが、スハルト政権下の村落で組織された他の様々な官製組織の名称と同様、直訳ではその活動内容を想像しにくい。

¹⁸ 慣習的に、刈り取った稲の十分の一が報酬として与えられ、これを売却して現金を作った。集団の資金集めのためにこの稲刈りが行われる際には、水田を所有する成員は、稲刈りをする機会を当集団に優先的に提供しなければならなかった。筆者の確認した限り、1950年代、60年代には全てこの方法によって集会所や寺院が建てられていた。P村には、この稲刈りを何年も続けて寺院を再建したばかりでなく、共有する水田を新たに購入した寺院集団もある。バンジャールによる稲刈りについてはウォレンの報告がある[Warren 1993: 169-172]。

¹⁹ その要因は様々に考えられるが、何より若い世代が農業労働を卑しき労働として嫌うようになったことが大きい。関本によれば、1970年代後半のジャワ村落の若者たちは、農事賃労働を教育のない者の後進性と無知を表象するものとして嫌っていたが、都市での仕事を見つけるのは困難で、その多くは仕事もなく村にたむろしていた。彼らが村で行われる国家行事の際の共同労働に動員されたという[Sekimoto 1997: 315-316]。バリのバールが若者の労働力を利用した活動であることは、同様な背景がバリ村落にもあったことを示すと考えられる。

²⁰ ケチャ *Kecak* などバリ芸能の観光客向け公演もその一つと言える[cf. Warren 1993: 172-177]。ただし、これはサヌールやウブドなど観光客の集まる地域の住民でなければ困難であった。そもそも1970年代には、バリ芸能にはつきもののガムランを所有するバンジャールはほとんどなく、高価な楽器を購入し、指導者を呼んで練習を重ね、演奏者や踊り手を養成して興行できるまでには大変な労力と時間と資金を要した。実際には、P村ではウブドの観光発展に伴って1980年代後半から村内のバンジャールが競うようにしてガムランを購入し、次々と観光客向けの商業公演に乗り出していくが、そのガムラン購入の主な資金源はバールであった。その他の方法としては、闘鶏の開催、1981年に州政府により闘鶏が禁止され、代わって登場し

でもオートバイなどが当たる宝くじ *undian berhadiah* の販売は、現在でも寺院がよく行っている。しかし今日のバリで主流の資金集めの方法といえばバールであり、他の方法はバール開催の補的手段として行われることが多い。

1980年代に入るとバリ住民のスワダヤによる「開発」は勢いを増し、村同士、バンジャール同士、あるいは寺院同士が競争し合って「開発」事業に取り組む状況が出来上がった²¹。P村では、村民のスワダヤによって村役場の前に25m×32mの巨大な多目的ホールを建設するという、当時のバリでは前代未聞のプロジェクトが構想され、1987年に着工した。建設費は見積りの段階で総額 Rp. (=Rupiah 通貨ルピア) 150,000,000 (当時約1,410万円) に上るもので、村は資金を調達する際、手始めに、一等に自動車(当時は主に人を乗せていた小型トラック)が当たる宝くじの販売と、大規模なバールを行った。1988年に臨んだ村落コンテストでは建設中のこの建物の存在が強くアピールされたが[Desa P. 1988]、州レベルでの入賞はできなかった。それほどバリでの「開発」競争は激しいものになっていたという。この80年代の開発ブームの中で、バールもバリ全島規模で盛んになり、稲刈りに代わる資金集めの活動として定着したのである²²。

村で活発にバールが行われるということは、住民の「開発」意欲が強いことの証であるのみならず、「開発」が進んでいることの証でもある²³。今日では、建物と同様に、バール自体が村の「進歩」の程度を測る指標となっている。つまりバールが「ラメーrame」(賑やか、盛況)であることは、その土地の人々の消費能力が高いこと、つまり経済的に豊かであることを象徴するのである。バールは人々が他地域の状況を知り、互いに比較する機会ともなっており、どこのバールがラメーであったかは、どこから来た客がすごかったかということとともに、よく話題に上る。自分の村のバールがラメーであることは、自分の村の儀礼がラメーであることと同じく自慢の種である²⁴。

たと言われる宝くじの販売、(地元民向けの)舞踊劇の上演、そしてテレビが普及する前は映画上映などもあった。

²¹ その背景には、この時期の観光産業の著しい発展に伴い、住民の生活が急速に豊かになってきたこともある。

²² P村では、村内のバンジャールが争うようにしてバールを開催するようになっていた1980年代後半に、たまたま二つのバンジャールが同時にバールを開催し、様々な混乱が生じる事態が起こった。複数の集団が同時にバールを開催すれば村民の金銭的負担は増し、また開催集団の間で集客競争となり、集金の効率も下がる。これにより直ちに行政村のレベルで協議がなされた。以来、村内のバンジャールによるバール開催については、各バンジャールに順番にその機会が与えられるという規則の下に秩序立って行われている。

²³ 1970年代以来のバリ住民の「進歩」に対する態度は、スハルト体制崩壊後の現在も基本的に変わらないどころか、高級志向が強まる中で、彼らの競争的な「開発」はさらに加速している。周囲と比べてすでに十分立派な集会所を持つバンジャールであっても、周辺道路をアスファルトから石畳にしたり、彫刻を施した門を備えた煉瓦の塀で囲ったり、柱に彫刻を施し金箔を塗るなど、建物の高級化を図る改築工事が次々と進められているのである。

²⁴ 2002年10月のクタでの爆弾事件の直後には、地元の新聞に「バザール不況」という記事が出ていた(“Bazar Lesu, Warung Mini Jadi Alternatif,” *Bali Post*, 22 November 2002)。観

バリ社会の消費能力の高さを反映して、今やバールは、バンジャールや寺院といったバリ人の日常生活に深く関わる慣習組織だけでなく、任意集団 *seka* である芸能集団²⁵、各種の非営利団体やクラブやサークル、大学内の組織や政党組織など多様な集団組織が、最も手っ取り早い資金集めの方法として好んで行うようになっている。バリ社会の富裕化に伴い、バールにより集金可能な金額も年々増えている²⁶。こうしてバリ人がしばしば自負して語るように、一つの目的の下に成員が一体となり、並々ならぬ機動力を発揮するバリの集団組織の力は、稲刈りからバールへと形を変えつつ生き続けている、という主張も成り立つのである。稲刈りからバールという変化は、自分たちが「時代の発展についてきた」結果の「文化の進化 *evolusi budaya* (i.)」であると表現する者もいる。この中で、今日のバールは、豊かになったバリの世相を自ら見つめ、社会内部の競争的な消費傾向と人々の消費欲望とを、むしろ巧みに計算して開催されるものとなっている。

IV 顕示的消費の舞台としてのバール

バールが活況を帯びたまさに 1980 年代に、「見せびらかしの文化 *budaya pamer* (i.)」は生まれたとバリ人たちは言うが、バールはまさしくその舞台の一つである。そこでは、社会集団間の競争だけでなく、個人の間での競争も展開している。そして、競争を貫くのは、今日バリ人の消費生活のあらゆる場面で観察される顕示的消費の精神、即ち「ゲンシー」なのである。ゲンシーとは、「尊厳、威信」といった意味を持つインドネシア語であるが、今日ではとりわけ、高価なものを買ったり身につけたりすることによって、自己の「尊厳、威信」を周囲に誇示しようとする心理や行為を表す。

先にも触れたように、バールに来るのは匿名の客ではない。事前に招待されてやって来た客は、まず受付で名前や住所、所属先などの記帳を求められ、会場にいる招待者の出迎えを受ける。さらに、テーブルに着いてしばらく経つと、「〇〇村××バンジャールの△△様、ご来場ありがとうございます。どうぞバールをお楽しみ下さい *Selamat ngebar!*」と、インドネシア語で放送される。つまりバールに来た客は、どこから来たのか、何者であるのかを知られ、バールでの消費行動は周囲の人に常に観察されるのである。したがっ

光客の激減によりバリ人たちの消費が落ち込んだからである。ここからも、バール（バザール）が汎バリの経済指標となっていることが理解できよう。

²⁵ たとえば、P村のある芸能集団は、1999年のバリ芸術祭 Pesta Kesenian Bali でのガムランコンテストに参加が決まった際、政府から受けた準備金（約 Rp.32,000,000＝約 45 万円）では足りないとして、3日間のバールを開催し、総額約 Rp.60,000,000（約 85 万円）を使って、メンバー全員に新しい豪華な衣装をあつらえ、楽器を整備した。

²⁶ たとえば、P村の共同寺院 *Kahyangan Tiga* の一つが寺院の大々的な改築工事の費用の一部を賄うために 1998年から境内で3回に亘って開催したバール（いずれも4日間）の純利益は、1998年6月が Rp.65,000,000、1999年7月が Rp.85,000,000、2002年3月が Rp.99,000,000（約 130 万円）と上がっている。ちなみに、バリの中でも観光産業により潤っている地域である P村を含むギアニャール県のウブド郡は、バールも盛況であることで知られ、集金額も他地域に比して大きい。

て人々はバールに行くとなれば、すでにかんりの出費を覚悟している。30代半ばのある既婚男性は、「バールに行く時はいくら持っていくか考える。ゲンシーでもある。行くこと自体、ゲンシーだ。俺たちは××バンジャールの者だってことでね」と語った。「だから数週間前から一生懸命、小遣いを節約して過ごすのだ」と。バールで高額の出費をすることは名誉とされる。実際に P 村では、2000 年に村内で開催されたあるバールで、村のある富裕な若年男性が一人で Rp.2,000,000 (約 2 万 8 千円) 払ったという話が、後々まで村人の間で語り継がれていた。

事前に売られるクーポンは、2000 年代の初めで一枚 Rp.20,000 か Rp.25,000 (約 300 円) であった²⁷。通常一枚で (A) ビール大瓶一本とピーナッツ、または (B) 一食分の食事とコココーラ、といった組み合わせのいずれかと交換できる。人々が普段利用する「ワルン *warung*」と呼ばれる食堂では、野菜炒め (Rp.3,000) と白飯 (Rp.1,000) とお茶 (Rp.500) で Rp.4,500 程度であるから、このクーポン一枚でも人々にしてみればかなり高い。ところが人々は、クーポンを使った飲食だけで済ますことはできない。P 村では決して豊かとは見なされない中流の女性たちにこのことを尋ねると、「クーポンだけで払う？それは恥ずかしい (ゲンシー)！」と大笑いされた。バリ人は、威信ゆえに「恥ずかしい *lek*」「恥ずかしくてできない *sing juari*」という心情を表現する語としてもよく「ゲンシー」を用いる。つまりそれはゲンシーゆえに、とてもできないのだという。彼女たちもバールではクーポンを使う他に必ず何品か注文し、最初から持ち帰り用に包んでもらったりする。それゆえ人々は、職場の友人などから義理でクーポンを買っても、金銭的に余裕が無い時はクーポンが無駄になっても最初から行かないのである。どの家庭にも大抵何枚か未使用のクーポンが残っているのはそのためである²⁸。

もっとも、バールではあらゆるものが通常より高い値段で売られる。普通のバリ人にとってバールとは、とにかく「高い *mael*」ところである。最近ではまた一段と高くなり、表 1 のメニューを見ての通り、通常の値段の倍どころか、ものによっては 3、4 倍している。たとえばナシ・ゴレン *nasi goreng* (焼き飯) は、通常ワルンでは目玉焼きを付けても Rp.3,500 ほどであるのに対し、バールでは Rp.12,000、生バンドのある日は Rp.14,000 となっている。通常 Rp.1,500 ほどのコココーラは Rp.5,000、バンドの日は Rp.6,000 である。元来高価な嗜好品であるタバコも、普段の倍の一箱 Rp.13,000 である。

²⁷ クーポンを事前に売る方法は 1990 年代後半に一般化した。現在では、金額の異なる 2、3 種類のクーポンを用意することが多い。

²⁸ 実際に入手したバールの会計資料 (2002 年時) を見ても、クーポンだけを使って支払いを済ませている客はほとんどいない。クーポンだけを使っているのは、いずれも持参したクーポンの数自体が多い客である。羽振りのよい事業主などは、バールのクーポンを「寄付」として何十枚という単位で買うが、それを従業員に配り、本人はバールに赴かないことが多い。多数のクーポンを持参するのは大抵こうした事業主の代理で来た従業員たちである。

表 1: バールのメニュー (2002 年 6 月 29 日-7 月 2 日、P 村 B バンジャール青年団開催)

DAFTAR MAKANAN (メニュー)			
Makanan (食事)		Minuman (飲み物)	
Nasi Putih 白飯	Rp. 3,500	Bir Gede ビール大	Rp.15,000 (<u>Rp.17,500</u>)
Sate Kambing 山羊肉の串焼き	Rp.15,000 (<u>Rp.17,500</u>)*	Coke コココーラ	Rp. 5,000 (<u>Rp.6,000</u>)
Gulai Kambing 山羊肉の煮込み	Rp.10,000 (<u>Rp.12,500</u>)	Sprite スプライト	Rp. 5,000 (<u>Rp.6,000</u>)
Nasi Goreng 焼き飯	Rp.12,000 (<u>Rp.14,000</u>)	Fanta (Red, Org) ファンタ(赤、オレンジ)	Rp. 5,000 (<u>Rp.6,000</u>)
Cap Cay 野菜炒め	Rp.10,000	Teh Botol 紅茶ボトル	Rp. 3,000
Sayur Hijau 青菜炒め	Rp.10,000	Air Mineral ミネラルウォーター	Rp. 3,000
Ayam Goreng 鶏のから揚げ	Rp.14,000 (<u>Rp.16,000</u>)	Es Bola 氷	Rp. 1,500
Makanan Ringan (スナック)		Rokok (タバコ)	
Kacang Asin ピーナッツ	Rp. 5,000	Marlboro マルボロ	Rp.13,000
Kacang Kapri 豆菓子	Rp. 5,000	Sampoerna サンプルナ	Rp.13,000
		Dji Sam Soe ジー・サム・スー	Rp.13,000
		Gudang Grm グダン・ガラム	Rp.11,000
Selamat Menikmati (どうぞお楽しみ下さい)			

*括弧内はバンド演奏時の料金

このうち今日バールの最も大きな収入源となっているのが、ビールの売り上げである。バールの収益がどのくらいであるかは一般に、ビールが何ケース *krat* (大瓶 16 本入りのケース) 出たかで表現される。P 村の場合、4 日間で 100 ケースは超えるため、最初に仕入れる目安が 100 ケースであり、盛況であれば最終的に 150 ケース (=2,400 本) を超えるビールが消費される²⁹。ビールは普通の店でも大瓶一本が Rp.9,000~Rp.10,000、約 120 円であり (2003 年現在)、月収が 5 千円から 1 万円程度のバリ人にとっては非常に高価なものである。バールで盛んに消費されるこのビールは、近年バリ人の間では、車や携帯

²⁹ それゆえ、バール終了後に会場に残るつんとした匂い、即ち小便臭いことが、バールが盛況であったことを示すもう一つの証である、と人々は語る。会場にはトイレはあっても一つであり、男性は会場の裏側に回って小便をするからである。

電話と同様に顕示的な価値を持つ、代表的な「ゲンシー消費財 *barang gengsi*」となっているのである。

ゲンシー財であるビールと対置されるものに、アラック *arak* というバリの地酒（椰子酒）がある。これはアルコール度約 40%の強い酒であるが、コココーラの空き瓶一本分の量で、ビール一本の半額程度である。バリには元々酔うまで酒を飲む習慣はなかったと言われるが³⁰、今日アラックのココーラ割りなどは日常的に嗜まれており、若者がアラックを飲んで騒いでいる場面もよく目にする。それに対しビールは未だ家庭で日常的に飲まれてはいない。安く酔えるアラックがあるにもかかわらず、人々の間には公の場ではビールを飲もうとする顕著な傾向がある。つまり、飲み慣れているわけではないビールを飲むこと自体が、ゲンシーなのである。それゆえ、普段はビールを飲むことのない人がこれ見よがしに大量に飲んだりすると、「モデルンぶっちゃって」——あえて訳せば「金持ちぶっちゃって」——と言われる。「うちの息子が昨日ビール飲みすぎて酔っ払ってさー」といった語りは、嫌味ととられることも多い。

ここで再び、「モデルン」というバリ人のイーミックな「モダン」概念が現れる。この「モデルン」に対立するのは、「伝統 *tradisi*」ではない。この「モデルン」は、「遅れた、古臭い、貧しくみすぼらしい」という意味を持つ「クノ」という概念と対立し、「新しく豊かなもの」を表すのである。そしてこのモデルンとクノの対立概念が、今日のバリ人のゲンシーという消費行動の基礎となっている。人々が顕示的消費に用いるもの、即ちゲンシーの対象となっているあらゆるものは「モデルン」と言われる。この場合「モデルン」は、「高価な、贅沢な、高級な」といった意味を持つすぐれて経済的な概念であり、「西洋的」という意味とは一致しない。人々の日常生活を取り囲むあらゆる「もの」（消費財）は、金銭的な尺度によって差異化・階層化され、モデルンとクノの対概念を軸に階梯化されているのである。このモデルン対クノの言説に基づくバリ人のモデルン志向は、バールにおける消費物を検討しても明らかになる。高価なビールは「モデルン」なものの、即ち「豊かだっかい」ものである。反対に、安いアラックは「クノ」なものの、即ち俗な言葉で訳せば「貧しくダサイ」ものである。この「ダサイ」アラックはそもそもバールのメニューには入っていない。バールとは「クノ」なものは置いていない場なのである。バールで扱われる消費財には、いずれも「モデルン」とであるという、一つの共通する特徴が存在する。

このモデルンなビールがバールでは通常の 1.5 倍から 2 倍の値段であるにもかかわらず、特に男性客はこれを次々と注文し、ボトルをテーブルにずらりと並べるのである。それが「勇ましい *gagah*」ことと評価されている。一つのテーブルで 2 ケース（＝32 本）を消費することも稀ではない。中には最初から 16 本入りのケース単位で注文する者もいる。し

³⁰ たとえばアラックは、酒というよりは薬のようなもので、年寄りが野良仕事から帰った後や就寝前などに、体を温めるために少しだけ飲むようなものだったという。

かも、バルではビールのボトルは空になっても片付けない。結果、ボトルはどんどんテーブルに溜まり、テーブルが一杯になると床にもずらりと並べるのである。それゆえバルは、慣習衣装を着て接客にあたる青年団の女子をはじめ、髪をほだき、ジーンズやミニスカートでやって来る若い娘たちにとっては、どのテーブルにたくさんボトルが並んでいるかを見て、金持ちの男を見つける機会ともなっていると言われる。

バルで提供される食事も全てモデルンなものである。たとえば、バルでビールのつまみとして最も消費されるサテ・カンビン *sate kambing* (山羊肉の串焼き) は、ジャワのマドゥラ島の料理と言われるが、バリの人々にとっては値の張る「贅沢な *mewah*」料理の代表である。1990年代半ばにはすでに P 村にもジャワ人が経営するサテ・カンビンの店が一軒あり、若者にとっては女の子をデートに誘うお決まりの店になっていた。バルでは通常の倍額であるこのサテ・カンビンと、ビールとともに何皿も注文するのが「かっこいい *keren*」、つまり「モデルン」だと言われる。しかもバリ人は普段、白飯なしでおかずだけを食えることはないため、バルでは白飯を頼まず、サテだけを食えることがゲンシーなのである³¹。

バルとカフェ：外延にあるジャカルタ発のモダニズム

テーブルを埋め、客がいるうちは片付けられることのないビールの空き瓶は、近年バリで急増してきた地元住民向けのカフェの特徴でもある。カフェといえば、今日マクドナルド *Makdi* やケンタッキー・フライドチキン *Kentaki* / *K F C* ^{カー・エフ・チェー} といったファーストフード店と同様に、インドネシアでは「金持ち *orang kaya*」がベンツ *Mersi* ^{ベ・エム・ウエー} や *B M W* で乗り付けるところ³²、つまり都会の新興富裕層、いわゆる「新中間層 *kelas menengah baru*」のシンボリックな消費の場である。アジア通貨危機が襲った最中の 1990 年代末には、ジャカルタではカフェだけが賑わっているという事態が、経済危機とは無縁な金持ちもインドネシアには実はたくさんいるのだ、という事実を象徴するものとして語られた [Wardhana dan Barus 1999: 183]。このジャカルタの新中間層のシンボルであるようなカフェが、バリでは通貨危機の影響を受け始める 1997 年の終わり頃からブームとなり³³、観光客のいな

³¹ 平均的なバリ人の普段の食事は、平均的な日本人の食事と比較すると、おかずが極端に少ない。通常バリ人は大きな皿に一杯に盛った白飯を、一つまみほどのおかず（揚げた塩魚や豆腐、少々の野菜）と混ぜながら食べる。

³² マクドナルド、ケンタッキー・フライドチキンはいずれもアメリカ資本によってインドネシアで拡大しつつある飲食店網であり、アメリカ本国では低価で手軽な、つまり威信とは無縁の価値を付与されている。しかし、バリを含むインドネシアでは、高価格、店構えと食品の新奇さによって、最もゲンシー（威信）でモデルンなものとして受容されている。ベンツと *BMW* は、ゲンシーによる消費物の階梯の中で最も上位に位置する自家用車の中で、さらに最高位に位置づけられるブランドである。

³³ この新しいローカルカフェの最初の店とされるデンパサール市内（サヌール）のあるカフェのバリ人店主に尋ねたところ、カフェを開くきっかけとなったのは、「なぜバリにはまだカフェがないのか」というジャカルタからの友人の言葉だったという。

い町や村にも次々と出来ていったのである³⁴。急速に広がったこのローカルカフェは、騒音問題に加え、麻薬や売春の巣ともなり、地元の新聞では社会問題として取り上げられることが多い³⁵。しかし実際に訪れてみると、その雰囲気は村人たちが手作りで行うバルと酷似している——暗い照明、大音量の音楽、国内のトップスターの映像を流し続けるカラオケ用のテレビ、テーブルに座って接客する女の子、そして林立するビール瓶。現在のバルはまさに、ジャカルタから飛び火してきたようなこのインドネシアにおける最先端の流行としてのカフェを自前で作っているものと言えるのである。つまり、元来接点のなかったバリのバルとジャカルタ発のカフェとの間に多くの共通する消費文化の要素——顕示的消費、ビール、カラオケなど——を見出すとき、現在のバルは、バリ人たちが、インドネシアの最も中心的なところで展開している「モデルン」、即ちジャカルタ新中間層の顕示的で派手な消費生活を志向する中で行われていることが理解できるのである。

とりわけ 1980 年代半ば以降、スハルト体制下の開発の恩恵を受けてインドネシアの都市、特に首都ジャカルタで急成長した新中間層をめぐっては、内部の多様性を強調する立場[e.g. Young 1990; Robison 1996]もあるが、基本的には、この階層はとりわけ消費行為によって可視化し、高い水準の消費への関心とそれに基づくライフスタイルを志向する共通の価値観によってその存在が認められてきた[Dick 1985; 1990]。もしくは、ジャカルタを中心に全国に広がる、即ち国民文化になりつつある、新しい「中間層文化 middle class culture」[Mahasin 1990: 138]を形成していることで、その存在が注目されてきた。彼らがライフスタイルの一部として打ち出す消費主義と、その顕示的で高級志向の派手な消費文化の台頭によって、1990 年代には「金持ちはかっこいい」というのが、インドネシアの経済をめぐる支配的言説における中心的メッセージとなった[Heryanto 1999: 162]³⁶。

豊かになった今日のバリ社会を特徴づけているゲンシーという消費スタイルは、このジャカルタの新中間層を特徴づけるのと同じ顕示的消費という要素を含み、かつそれは明ら

³⁴ 今日、特にバリの主要な観光都市が点在する南部から中部の村々では、海外輸出向けの手工芸品（木彫、銀製品、インテリア雑貨や家具など）の家内工業が、農業に代わる主要産業となっている。この手工芸品産業は、インドネシアの多くの国民を苦しめたアジア通貨危機の際には、通貨ルピアの急落によって輸出が急増したことにより、逆に大きな利益を得た。

³⁵ たとえば、“Selamatkan Desa Adat dari Kafe Konotasi Negatif,” *Bali Post*, 31 Maret 2003. “Keluar dari Pakem,” *Bali Post*, 8 April 2003. “Menghadirkan Suasana Ancol di Pantai Delod Berawah,” *Bali Post*, 8 Mei 2003. “Jalan-jalan di Serangan—Ada Kafe yang Bebas Esek-esek,” *Bali Post*, 28 Agustus 2004. など。

³⁶ ヘルヤントによれば、1980 年代までのインドネシアの大衆にとって、「金持ち」とは「我々以外の者」、即ち西洋人と中国系住民であり、それは敵意の対象であり、常に否定的なイメージで捉えられていた。この中でインドネシアの新興富裕層も、一般社会の倫理的な支持を得られないという問題に直面した。インドネシアの産業資本主義の発展が、資本主義的社会関係を正常で合理的で公正なものとするイデオロギーを欠いてきたためである。ヘルヤントは、1990 年代に事態が根本的に変化し、今や富裕であることは「かっこよく、かつ必要なこと」であるという価値観が支配的になっていることは、消費主義を含むライフスタイルという社会的な場での新中間層のアイデンティティ・ポリティクスの結果であるとしている[Heryanto 1999]。

かに同様の消費水準である。また、バリ人のモデルン志向としてのゲンシーの事象は、極めて欧米嗜好でコスモポリタンとも評価されるライフスタイルを送るこのジャカルタ新中間層と共通する消費物と消費行動を多く含んでいる³⁷。そうしたバリのゲンシーの性格が、とりわけバールのコンテクストにおいて顕著に見出せるのである。つまり、バリ人のゲンシーというモデルン志向が、スハルト体制下に開花したジャカルタ発のモデルン志向、即ちインドネシア版モダニズムのバリ版であることが見えてくるのである³⁸。

スハルト新秩序体制下の「開発」イデオロギーの中で発展し、現在に至るバールという活動は、常にバリ人の都会的な想像力の中で実践されてきたものでもある。そこに表現されたバリ人たちの志向するモデルンは、西洋的なモダンというよりは、むしろ一貫して、インドネシアのコンテクストにおけるモデルンなのである。

V モダンの窓口としてのバール

ここで歴史を遡ってみると、バールは、オランダ植民地時代から続いていたモダニズムの系譜に位置づけられる。バールの起源は、オランダ時代には地元の領主が開催する「ラジャ・クニン *Raja Kuning*」として知られ[Wijaya 2000: 115]、日本軍政期、東インドネシア国時代を経て 1950 年代まで盛大に行われていたパサール・マラム *pasar malam* (ナイト・マーケット) に求められる。植民地時代は現在の郡にあたる行政地域の中心であった P 村でも、パサール・マラムは役場前の広場でしばしば開催されていたという。当時を知る高齢者たちの記憶によれば、少なくとも 1940 年代末のパサール・マラムは二週間ほど続く大規模なものであった³⁹。そこでは喜劇などの映画が上映され、舞踊が上演されるほか、輪投げやダーツなどの新しい遊び、花札やドミノなどの賭け事をする場所、ズボンやブラウスといった洋服を売る店、新奇な飲食物、スプーンとフォークを使う食事を出す店など、当時の人々の好奇心を掻き立てる実に様々なものが提供されていた。人々にとっては貧しい生活の中の大きな愉しみとして、誰もが一張羅の服を着て出かける場だったという。

バリがインドネシア共和国に参加した後の 1950 年代には、デンパサールなど都市部で

³⁷ 新中間層をライフスタイルの側面から捉え、その消費生活の具体的内容を整理・分析したものとしては、倉沢[1996]、Wardhana dan Barus [1999]などが参考になる。なお、倉沢は、ジャカルタ新中間層を特徴づける価値観として「ゲンシ」（ええかつこしい）という言葉に言及している[倉沢 1996: 112-113]。

³⁸ ゲンシーというバリ人が「モデルン」の語で表現する志向をバリ人のモダニズムと認識したように、ジャカルタ中心のインドネシアの価値志向も「モデルン」という価値観であることからモダニズムと認識できる。これがグローバルな場面でのモダニズムの一環なのか、あるいはポスト・モダニズムの一環なのかは、いずれ議論する必要があるが、本稿ではとりあえず、インドネシア版モダニズムのモデルンになっているものをグローバルなモダニズムと捉えておきたい。

³⁹ 現在のバリ人の言によれば、パサール・マラムは資金集めの意図もあったという。

大々的に開催されていたパサール・マラムは、家族の写真を飾り、丸テーブルと椅子のセットに飾り棚、ラジオやミシンを陳列した応接間のある、煉瓦造りの「役所風の家 *rumah kantor*」に住み、セダンやオートバイを持つことに憧れる都市住民で溢れかえる、極めて熱気に満ちた、当時の都市の最たるイベントになっていたという[Wijaya 2000]。現在のバールへ続く、モダンな（先進的な）飲食店を開いて資金を集めるという活動は、政党活動が盛んであったこの 1950 年代に、そうしたパサール・マラムでの人々の熱狂に乗じて、特に 1955 年の初の総選挙に向けて続々と結成された政党組織が始めたと言われる⁴⁰。それが 1965 年から 66 年にかけての共産党員の虐殺を頂点とする政治的混乱を経て、1960 年代後半から、デンパサールを中心に、バンジャールや村といった住民組織に（稲刈りに代わる資金集めの方法として）受け継がれ、現在に続いてきたのである⁴¹。

つまりバールは、初めから、バリの民衆にとって常にモダンなものの窓口となってきたのである。バールでは常に流行の先端に行くものが提供され、そこに出向けば人々は常に「新しい雰囲気 *suasana baru* (i.)」を味わうことができた。しかも、インドネシア共和国にバリが包摂されて以降は、流行の先端に行くものとは、ジャカルタに代表されるインドネシアのそれに他ならなかった。たとえばバールで提供される娯楽を見ると、1970 年代にはインドネシアの最初の国民音楽と言われるクロンチョン *keroncong* の生演奏に合わせて社交ダンス *dansa* を踊っていたという。1980 年代には、これも全国的に流行った大衆音楽であるダンドゥット *dangdut* が流され、1990 年代からは、インドネシアの都市に成長した新中間層の好む、欧米のハードロックやレゲエ、加えてこの時期に急速に発展したインドネシアポップスが大量で流され、ディスコやカラオケが催されるようになった。つまり、バールの娯楽は、インドネシアの中央の都市文化、消費文化の流行り廃りと連動している⁴²。

またメニューを見ると、1970 年代、80 年代にバールの目玉料理であったものは、現在ではワルンの定番メニューとなった野菜炒め *cap cay* などの「中華料理 *masakan cina*」、ナシ・ゴレンやミー・ゴレン *mie goreng*（焼きそば）をはじめ、ガドガド *gado-gado*⁴³ や甘い味付けのジャワ風の牛肉のサテ（串焼き）など、代表的なインドネシア料理として今日知られるジャワ由来の料理である。これらのバールメニューは、常にその時代時代にはバリ人たちがめったに口にできなかった「高価」で「贅沢」な、今で言う「モデルン」なも

⁴⁰ この情報は、最も早くからバールが行われていたとされるデンパサールのいくつかの地域で筆者自身が行った聞き取り調査に基づく。これを裏付ける文字資料は入手できていない。この時期バリで「異常な数の政治組織が結成された」[Robinson 1995: 195]状況を最も詳細に記述しているロビンソンも、これらの政治組織の経済的基盤には言及していない。

⁴¹ 1970 年代初めまでは、「アマル *amal*」（善行、慈善）というインドネシア語を用いて「アマルの市 *pasar amal*」「アマルの夜 *malam amal*」などと呼ばれていた。

⁴² インドネシアの大衆音楽の展開については、山下[1994]、北野[1995]などが参考になる。

⁴³ 揚げた豆腐やゆでた野菜をピーナッツソースであえたもの。

のであった⁴⁴。こうした料理を生まれて初めて食べた機会はバールであったと言う 40 代以上の村人は多い。1980 年代初めまでのバールは、酒を飲む場（カフェ）ではなく食べる場（ワルン）であり、食事のメニューは現在よりはるかに豊富であった⁴⁵。そしてバールの台所で指揮を執ったのは、常にその時代に村で「トップ *top*」と見なされた料理人であった⁴⁶。

最近のメニューには、ケンタッキー・フライドチキンを真似て作った鶏のから揚げ *ayam goreng, ayam KFC / kentaki* や、1990 年代末に都市部に専門レストランが次々と現れる中で同様に人々の憧れとなった、ロンボク島料理と言われる鶏のグリル *ayam taliwang* などが新たに登場しているが、食事の品数は減り、バールはカフェ（酒場）の性格を強めてきている。都市部では 2002 年頃から、より高価な黒ビールも登場している⁴⁷。このバールのカフェ化の一方で、1990 年代末から、通常のバール（バザール）とは別に、事前にクーポンを売って注文をとり、（通常のバールと同様に）ゲンシー財となるモダンな食事（及び、ボトル飲料より高額な缶飲料）を各家庭に届けるという新しい形式のバザール *bazar antar, bazar keliling* も、より手軽な資金集めの方法として寺院や村がしばしば行うようになった。この宅配バザールでの人気メニューは圧倒的に「ケンタッキーの」という修飾の付くフライドチキンであるが、2002 年 2 月に P 村全体で構成される青年組織 *Karang Taruna* が実施した際には、初めてピザが登場し、村民の注文はこれに殺到した⁴⁸。

この「ケンタッキー」やピザの印象について、村の 20 代末のある女性は次のように語った。「第一に高い、第二にエリート」。若年層のバリ人がよく使うこの「エリート *elit*」という形容詞は、ジャカルタ発の（自国製）テレビドラマで見るような、清潔で高価なビジネススーツを着て高級外車を乗り回すような「金持ち」のイメージを表現する。マクドナルドについても同じだが、「ケンタッキー」がアメリカ由来のものであることを知るバリ村民はほとんどいない。ワルン（食堂）とは異なる高級な店構えとワルンの食事の数倍という高額さ、それゆえに都会の富裕層が好むものという、「ケンタッキー」に付着した高級感と示差的な価値が人々の消費欲望を掻き立てるのである。つまり、メニューを検討しても、現在のバールに現れるバリ人の消費嗜好は、ジャカルタ新中間層の嗜好と極めて

⁴⁴ 飲み物の種類も豊富で、コココーラやセブンアップなどのボトル入り飲料の他に、氷入り生オレンジジュース *es jeruk*、アボカドジュース *jus apokat* といった当時のバリ人には同様に新奇的な飲み物であった果物のジュースも提供されていた。

⁴⁵ ビールはバールが始まった当初から置かれていたというが、一本を二人で飲んでみる程度で、今のようにボトルを並べる事態にはならなかったという。

⁴⁶ たとえば P 村では、村で最も早くからワルンを営んでいた華人のメンバーや、デンパサールの中華レストランで働いていた者、近年ではハイアットやヒルトンといった一流ホテルの厨房で働いている者などである。また、バールでこうした者の手伝いをして料理を覚えた村人が、後に自ら村内に新しいワルンを開くという現象も起きている。

⁴⁷ また近年では、会場の一角に装飾用にワインやウイスキーなどの洋酒のボトルを並べるケースも見られるようになった。

⁴⁸ この宅配バザールで提供される食べ物のほとんどは、開催集団が作ったものではなく、デンパサールやウブドのレストランや業者に注文して調達したものである。

類似することが顕著に見て取れるのである。

ここまで概観したところで、バールという活動が、バリ人のインドネシア・モダニズムを反映してきたことは明らかであろう。バールはインドネシア・ナショナリズムの全盛期であった 1950 年代のジャカルタ発のモダニズムの中で始まり、新秩序体制下の開発言説の中で全島に広がり、発展してきた。その背景には常にインドネシア全体規模で広がる消費文化の発展があり、バールで消費される娯楽や飲食物は、その中でバリ人が流行の最先端にあると想像するモダンなものであった。そしてカフェへと変貌した現在のバールに見られるバリ人の消費実践の外縁には、ジャカルタ新中間層が代表する今日のインドネシアの高級志向で華麗な消費文化があると言える。

新しいバリ意識と花開く消費文化

以上、バールを通じてバリ人がジャカルタを中心とするモデルンを志向している様子を見てきた。しかしながら、近年、バリの人々はジャカルタ発の流行だけをゲンシーの対象にしているわけではない。いわゆる「バリの」なものも「モデルン」として顕示的に消費しているのである。その背景として、スハルト政権時代の終盤になって開花したインドネシアの消費社会における、バリ人の自己イメージの変化を挙げるができる。

1990 年代のインドネシアでは、新しいマスメディアが急速に発展した。とりわけテレビ放送は、民間放送が開始されるや、猛烈な勢いで多局化が進み、これにより都会の華やかな消費文化が、ジャカルタから全国に向けて発信されるようになった⁴⁹。この新しい商業メディアの発展によって、世界有数のリゾートに発展したバリは突如、ジャカルタに勝るとも劣らないモデルンな場所として全国の大衆、そしてバリ人自身の知るところとなったのである。観光で豊かになったバリは、全国放送が開始される以前からこれを受信するパラボラ・アンテナの普及率がとりわけ高かった地域でもある[隈元 1992: 140]。

国内のメディアが映し出すバリとは、国際観光産業のまなざしが捉える宗教的芸術的バリではなく、海岸に溢れる外国人、豪華なホテルやお洒落なレストランに象徴される国際的先進的なバリである。そしてこのバリは、国内の富裕階層が贅沢極まりない休暇を過ごす場所として、トレンドィー・ドラマや映画の舞台として、あるいは自動車やインスタント食品、クレジットカードの広告の典型的な背景として、中央の新中間層が創り出し、地域差・民族差を越えて拡大する今日のインドネシアの消費文化の中心的な構成要素ともなってきたのである。国内の大衆の憧れの地となる中で、近年バリでは、国内観光客が急増するとともに、外部から概してバリ人より貧しい労働者が大量に流入した。

⁴⁹ インドネシアでは 1962 年にテレビ放送が開始されて以来、1989 年初めまで国营テレビ局 TVRI 一局の状態が続いていた。民放局の増加に伴い、多種多様な外国製番組も放送されている中で、最も人気があるのは自国製ドラマであり、視聴者が最も多い時間帯を占めている。近年のインドネシアのテレビ放送の発展については、内藤[1993; 2001]、小池[1995; 2005]などを参照。

この中で、今日のバリ社会が自己イメージを形成するコンテクストも、インドネシア国内消費社会に設定されていると言える⁵⁰。観光商品としてバリで売られているアロハシャツなどを国内のテレビスターが好んで身につけ、バリを示す DK で始まる自動車のナンバープレートを求めるジャカルタの富裕層が現れ、バリ発の様々な商品が外部のインドネシア人の間で一つの流行を形成する中で、現在のバリ人は、自らをインドネシアのマイノリティと感じているどころか、自分たちが流行の先端に行く、「進んだ *maju*」、モデルンな存在であると見なし、満足しているのである。今日のバリ人の、外部からは鼻持ちならないとも評される強い民族的な自信と文化的な確信は、むしろこうしたインドネシア消費社会のまなざしを取り込んだ結果の自意識、即ちインドネシアの中心的な存在であるという自覚にあると言える。

こうした今日のバリ人の自意識の変化を反映していると思われる変化が、最近のバールでの消費物にも現れてきている。バールでは従来、バリの芸能や娯楽が催されることはなかった。ところが 1990 年代後半から、都市部のバールでバリ芸能が催されるケースが見られるようになった。たとえば、南部の観光都市のクタでは、結婚式や人生儀礼の際の娯楽として行われるジョゲッド *joged* というバリ芸能が⁵¹、ディスコとともに、バールでの定例の催し物となっている。また、観光客が訪れない地域では、観光芸能として有名なバロン *Barong*（聖獣）ダンスなどをバールで催すケースが現れている。そして 2002 年半ば以降の最新の動向として、従来は「田舎臭い *desa, kampungan*」としてバリの大衆、特に若者には人気のなかった、バリ語で歌うバリポップス *lagu pop Bali* が、欧米やジャカルタ発のポップスとともにバールで流されるようになった⁵²。最近まで一般にバリ人は、公の場でバリ語を話すことは、インドネシア語のできないクノな人の象徴であり、恥ずかしいとして避ける傾向にあった。それが今やモデルンなバリ人が堂々と使うものになり、モデルンなバールでバリ語のカラオケが響き渡るようになったのである。

さらに、上述の宅配バザールでは、「ケンタッキーの」フライドチキンやピザとともに、家鴨の蒸し焼き *bebek tutu*、鶏の蒸し焼き *siap tutu* といったバリ料理が登場している。家鴨または鶏を丸ごと蒸し焼きにするこの料理は、多くのバリ人が最近まで食べたことの

⁵⁰ イスラム教徒の多いバリ北部で調査を行ったバースも、地元住民にとってのトレンドセッターとなっていたのは、彼らから見れば概して小汚い、貧しい格好をしている観光客ではなく、インドネシアのエリートやポップ歌手、映画スターであったと述べている[Barth 1993: 241]。

⁵¹ ジョゲッドと呼ばれる芸能は国内の他地方にもあるが、バリのジョゲッドは、女性の踊り手が、踊りながら、観客の中から男性を誘い出し、次々と一緒に踊るという娯楽芸能である。

⁵² インドネシアには地方語で歌う「地方ポップ *pop daerah*」というジャンルがあり[北野 1995: 9]、バリポップスも 1970 年代には存在していたが、1980 年代以降、中央からのテレビ放送に親しむ中でバリ人の好みは圧倒的にジャカルタ発の欧米やインドネシアのポップスとなり、1990 年代にはほとんど廃れていた。これがスハルト政権崩壊後の政治的気運の高まりの中で突如興隆し、都市を中心に急速に人気を得、2002 年 5 月に開局したバリ初の地方民放テレビ局 Bali TV が盛んに流す中で、全島で流行るようになった[cf. Darma Putra 2004]。

なかった値の張る「贅沢な」料理で、通常専門の職人が長時間かけて作るものである。こうした高級バリ料理も、モダンなものとしてメニューの中に加わってきたのである。

VI 肥大する消費、減退する共同労働

最後に、顕示的消費の舞台としての色彩を強めるバールが、まさにそれによって消費社会への自省の機会を人々に提供していることにも触れておきたい。今日バリ社会ゆえの集団の力が発揮される活動として語られるバールであるが、その実践面にも一つの変化が見出される。人々の言葉を借りれば「ゴトン・ロヨン」即ち集団の共同労働の減退である。

前述のように、近年では慣習組織のみならず、都市的な組織や団体もバール——今やバザールと呼ばれる——を盛んに行っている。それらの組織は 2000 年頃から、同時期に都市部で地元住民を対象として新たに急増してきたレストラン *restoran*——ワルンより高級とされる——やカフェ、そしてマクドナルドなどファーストフード店の会場を借りてバザールを行うようになった。この動きが、すでに都市部では、バンジャールといった慣習組織にも広がり始めているのである。

このような方法は、開催集団と店との「協働 *kerja sama*」と言われ、双方の側の利益になることが強調されるが、開催集団はクーポンを準備し、多少の飾り付けを独自に行う以外は、掃除や調理、皿洗いなど一切の労働をせず、当日、接客のために会場に集合するだけである。開催集団は店で元々提供されている食事の値段にいくらか上乗せして客に提供し、その分だけが開催集団の利益となる。したがって店の側としても損はない⁵³。

筆者が 1999 年に一年滞在したデンパサール市内の K 村 D バンジャールでは、1965 年に成立した青年団が成立記念行事の一環として翌年から毎年バールを行ってきたが、2002 年に K 村では初めてレストランを借りて行った。その直接の理由は、大学生を含む青年団の役員が、試験で忙しいといった理由で開催期日が迫っても準備に現れず、その結果、他の成員も腹を立て、働く意欲を失ったからだという。そこで急遽、市内の新しいレストランでのバール開催となった。すでに市内の他のバンジャールでそうした方法を採用始めていることを知っていたからでもある。

従来バールは、会場作りから掃除、食材や飲み物の手配、調理から皿洗いまで、全て集団の共同労働によって行われてきた。筆者が P 村で初めて観察した 1994 年 4 月の R バンジャールのバール開催の際は、一週間ほど前から何度も、成員に集合を知らせる木鐘 *kulkul*——各慣習組織が所有し、集団の象徴となっている——が鳴り、バンジャールの男

⁵³ たとえば 2003 年 1 月にジャワ島マランに在するある大学のヒンドゥー学生団体（ほとんどがバリ人）がデンパサール市内のカフェで開催したバザールでは、通常 Rp.11,000 のビールを Rp.17,500 で提供していた。同月に同じ市内の観光都市サヌールのマクドナルドで行われたバンド愛好者の団体のバザールでは、店で待機し、接客にあたる主催者側のメンバーさえ不在であった。マクドナルドの店長に尋ねると、地元住民の組織との「協働」はすでに何度も行っており、店の側としてはこうして地元の共同体社会に貢献しているのだと語った。

性成員が鉞 *belakas*——バンジャール成員の象徴——を携帯して集会所に集合し、竹や椰子の葉で壁や囲いを作り、次に青年団が箒を持って集合して掃除をし、机や椅子、会場を飾る植物を運び込んだり、ミラーボールや看板を作ったりと、連日作業をしていた。当日は早朝からバンジャールと青年団の全成員が集合し、サテ・カンビン用の山羊の解体、皿やガラスの洗浄、大量の食材の皮むき、調理と、男女が手分けして作業を行い、開催中も裏方では男性が交替でサテを焼き続け、女性は交替で調理をし、青年団も野菜を切ったり、皿を洗ったりと、連日働き通しであった。こうした共同労働が、人々の言うゴトン・ロヨンである。バールは現代の子供たちが初めてささやかながら台所仕事を覚える機会になっていたとも言われる。

しかし、このゴトン・ロヨンは近年急速に減退してきている。これはバールの活動に限らず、バンジャールの活動一般や儀礼の際の準備作業など共同体の社会生活のあらゆる場面で見られる傾向である。2003年2月の時点では、バンジャールがバールをレストランやカフェで行うという、筆者がデンパサールで確認した新しい動きを、P村の人々はまだ知らなかった。筆者の話聞いて人々は、「それはひどい、ゴトン・ロヨンが希薄になっちゃってるね」「デンパサールではもう共同体的 *sosial* 精神が壊れちゃってる」などと非難轟々であったのだが、同じ方向性をもつ変化は村でも着実に進行している。

それは、バールで提供する食事を全て開催集団が自ら作るのではなく、部分的に「買う *meli*」という形で1990年代後半から徐々に進んできた。つまり、人気のサテ・カンビンなどは、店を経営するジャワ人など専門業者に調理を委託し、材料費に労働費を加えた報酬を支払うという方法が採られるようになってきている。2002年6月にP村Bバンジャールの青年団が開催したバールでは、青年団は一切の台所仕事をしなかった。青年団が行ったのはクーポンやメニューの作成、会場の装飾、飲み物の手配と当日の給仕と接客のみで、食事については近所のワルンと契約し、一切を任せた——「丸ごと買った」。つまり、食材の調達から調理までの裏方の仕事を、10人ほどのスタッフを引き連れた契約先のワルンが行ったのである。会計資料を見ると、皿洗いの労働力も別に数人雇っている。

これは最近、急速に発展しているケータリング業と同じである。近年、富裕層の間では、結婚式などの人生儀礼の際に、レストランやホテルのケータリングを利用することが多くなった。こうしたケータリングの食事は、コカコーラなどのボトル飲料やビールを超える究極のゲンシー財でもある。この中で、元来観光客向けであったホテルやレストランも、富裕化してきたバリ人社会に新たなマーケットを見出し、儀礼の際のケータリング業に積極的になり出してきているのである。地元の経済新聞『ビジネス・バリ』の2002年11月のある記事は、昨今のケータリング業者は、高まる市場競争の中で、獣肉を食することを禁じられているバリ・ヒンドゥーの最高祭司のための特別の食事まで提供していると伝えているが、その中で、ケータリング業者はバザール（バール）についても、大きなビジネス

スチャンスとして視野に入れていると言及している⁵⁴。

こうした業者委託は、バールの利益率の低下をもたらす。また年配者からは、社会組織活動としてのバールが衰退しているとして、嘆きの声も聞かれる。しかし、現在のところは、利益率の低下を上回る消費の拡大によって、バールは依然、活性化し続けている。このように消費——しかも顕示的な——への関心が高まる一方で顕著に見られる、集団による労働の減退という現象は、ヴェブレンの論じた、労働をせず顕示的消費にいそしむ「有閑階級」の精神を想起させる[ヴェブレン 1998]。今日のバリ人の多くは、農作業をはじめ、道路工事や建設現場での肉体労働を「粗野な仕事 *kerja kasar*」として嫌い、それらを隣のロンボク島や東ジャワから流れ込んでくる出稼ぎ労働者にますます依存するようになっていく。一人前の女性の象徴とされてきた供物作りも、現在では卑しき労働として語られる傾向にあり、富裕な家庭では日常の供物の全てを使用人に作らせている⁵⁵。今日のバリにおける顕示的競争は、ヴェブレンが論じたような、労働からの距離をその基本的な尺度とするものとは必ずしも言えないが、少なくとも「粗野な仕事」という特定の労働から自由であることは、バリ人のゲンシーの重要な要素となっている。バールの活動において急速に衰退している裏方仕事——掃除や皿洗いをはじめ、米を炊く、肉を焼くといった炊事作業——は、今日、富裕な家庭では決まって使用人が行う「粗野な仕事」の範疇に属する労働であり、近年急速に富裕化してきた都市や村落住民の多くが厭うようになった労働である。即ちこの現象は、基本的には、ゲンシーというバリ人の消費主義的モデル志向が自ら内包するものであると言える。

しかしながら、こうしたゲンシー現象はまた、人々に内省をも促している。とりわけ共同労働の現場に「降りて *tuun / tedun*」こないという富裕層に顕著な性向は、労働の共有と親密さをイデオロギーとする共同体精神とは相容れず、共同体内部における倫理的な批判の焦点となっている。近年ジャカルタ新中間層と同様の新興富裕層の出現が見出されてきたジャワの村落でも、彼らがライフスタイルによって示すモデル志向は人々のモデルとなっている一方で、獲得した富を専ら個人的な消費に使い、共同体から距離を置く彼らの行動形態は、村落生活に様々な緊張を生み出してきたことが観察されている[e.g. Antlöv 1999]。インドネシアの中でもとりわけ経済発展を遂げたバリにおいては、ゲンシーが支配的な価値観となり、集団組織における労働が急速に減退する中で、人々は他方で、労働の共有によって確認されてきた社会的共同性 *sosial* の価値を、「進歩」の代償として失っていく美德として自省的に語るようになっていくのである。

⁵⁴ “Jasa Catering Menjamur Pilih Bali, Jawa dan Cina,” *Bisnis Bali*, 3 November 2002.

⁵⁵ この中で、バリの市場では出来合いの供物をイスラム教徒やカトリック教徒の非バリ人が商っているという光景も見られるようになっていく。参考記事として、“Orang Bali Jual “Kepala”, Sikap “Paras Paros” Terganggu,” *Bali Post*, 11 Oktober 2002. “Pedagang “Canang” pun Kini Kebanyakan dari Luar Bali,” *Bali Post*, 28 April 2004. “Diskusi Atasi Pengangguran di Bali (1): Malu, Gengsi, dan Rendahnya Komitmen Pemda,” *Bali Post*, 16 Juli 2004. など。

VII 結び

バールは、バリ人がバリ人に向けて行ってきた、バリ社会内部の文化的社会的実践である。とりわけスハルト体制のコンテクストで成立したバリの新しい実践であるが、それは草の根のバリ人の内発的なモダニズムによって支えられ、発展してきたものであることが見て取れたらう。そして現在バールをより一層活発化させているのは、階層的差異化が進む今日のバリ社会を席卷している、高級志向の顕示的消費を特徴とし、バリ人のイーミックな「モダン」概念に抛り立つゲンシーという消費主義的モダニズムである。言うなれば、今日のバールは資金を集める目的も、その手段も、ゲンシーによって成り立っている。少なくともバールを検討して明らかになるのは、このバリ人の内発的なゲンシー・モダニズムが、バリ経済を飛躍的に発展させてきた国際観光産業を背景とするグローバリズムの中のモダニズムではなく、インドネシア枠内でのモダニズムである点である。バールにおけるゲンシーの消費行動や消費物の内容に顕著に見て取れるのは、インドネシア消費社会の発展を背景に、インドネシアの中でも突出して豊かになった今日のバリ人が、ジャカルタ新中間層と価値観やモデルン志向を共有しつつ独自のモデルンを追求している姿である。そこに注目すれば、今日のバリ人がゲンシーの消費生活で表現しているモデルン志向が、インドネシア全体を方向付けるモデルン志向と一連の、もしくはそれを主導する動態であることが理解されるのである。別の言い方をすれば、今日のバリ社会を特徴づけるゲンシー・モダニズムは、スハルト体制下に開花したインドネシアの消費社会が志向するモダニズムのバリ版と見ることができよう。

ここで忘れてはならないのは、バールはバリ人のゲンシーによる消費的競争が顕著に発現する舞台の一つにすぎないということである。冒頭でも示唆したように、ゲンシーによるバリ社会内部の消費競争が最も熾烈に展開しているのは、寺院の周年祭や人生儀礼といった、バールとはまたコンテクストを異にする、儀礼の場面である。つまり、バリ人のモダニズムとしてのゲンシーの中心的な部分はむしろ「バリの文化」の局面にある。今後は、儀礼のコンテクストにおけるゲンシーの事象をも具体的に検討した上で、このバリ人の内発的なモダニズムとそれに伴う文化的社会的変化の動態をさらに分析していきたい。

参考文献

アンダーソン、ベネディクト

- 1995 『言葉と権力：インドネシアの政治文化探求』中島成久訳、日本エディタースクール出版部。

Antlöv, Hans

- 1999 The New Rich and Cultural Tensions in Rural Indonesia. In *Culture and Privilege in Capitalist Asia.*, Michael Pinches (ed.), pp.188-207. London & New

York: Routledge.

Barth, Fredrik

1993 *Balinese Worlds*. Chicago & London: The University of Chicago Press.

Darma Putra, I Nyoman

2004 Politik Lagu Pop Bali. Dalam *Politik Kebudayaan dan Identitas Etnik*, I Wayan Ardika dan Darma Putra (eds.), pp.315-333. Denpasar: Fakultas Sastra Universitas Udayana dan Balimangsi Press.

Dick, Howard

1985 The Rise of a Middle Class and the Changing Concept of Equity in Indonesia: An Interpretation. *Indonesia* 39: 71-92.

1990 Further Reflections on the Middle Class. In *The Politics of Middle Class Indonesia*, Richard Tanter and Kenneth Young (eds.), pp.63-70. Monash Papers on Southeast Asia-No.19. Clayton: Center of Southeast Asian Studies Monash University.

Heryanto, Ariel

1999 The Years of Living Luxuriously: Identity Politics of Indonesia's New Rich. In *Culture and Privilege in Capitalist Asia*, M. Pinches (ed.), pp.159-187. London & New York: Routledge.

鏡味 治也

2000 『政策文化の人類学：せめぎあうインドネシア国家とバリ地域住民』世界思想社。

北野 正徳

1995 「インドネシアのポピュラー音楽概観」、『インドネシアのポピュラー・カルチャー』、松野明久(編)、pp.9-26、めこん。

小池 誠

1995 「疾風怒涛のインドネシア・テレビ界」、『インドネシアのポピュラー・カルチャー』、松野明久(編)、pp.143-155、めこん。

2005 「グローバル化するインドネシアのテレビ番組」『インターカルチュラル』3: 80-99。

隈元 信一

1992 「衛星が変えるアジアの放送文化」『思想』817: 135-146。

倉沢 愛子

1996 「開発体制下のインドネシアにおける新中間層の台頭と国民統合」『東南アジア研究』34(1): 100-126。

Mahasin, Aswab

1990 The Santri Middle Class: An Insider's View. In *The Politics of Middle Class*

Indonesia., R. Tanter and K. Young (eds.), pp.138-144. Clayton: Center of Southeast Asian Studies Monash University.

McKean, Philip F.

1973 *Cultural Involution: Tourists, Balinese, and the Process of Modernization in an Anthropological Perspective*. Ph.D. Thesis. Providence: Brown University.

内藤 耕

1993 「開発体制と放送の多チャンネル化—インドネシアの事例から—」『情報通信学会誌』11(2): 59-65。

2001 「東南アジアの開発主義とメディア政策—国際競争のなかで」『マス・コミュニケーション研究』58: 7-20。

Parker, Lyn

2003 *From Subjects to Citizens: Balinese Villagers in the Indonesian Nation-State*. Copenhagen: Nordic Institute of Asian Studies.

Robinson, Geoffrey

1995 *The Dark Side of Paradise: Political Violence in Bali*. Ithaca & London: Cornell University Press.

Robison, Richard

1996 The Middle Class and the Bourgeoisie in Indonesia. In *The New Rich in Asia: Mobile Phones, McDonald's and Middle-Class Revolution.*, Richard Robison and David S. Goodman (eds.), pp.79-101. London: Routledge.

関本 照夫 (Teruo Sekimoto)

1986 「村と国家行事」、『東南アジアからの知的冒険：シンボル・経済・歴史』、原洋之介(編著)、pp.32-68、リプロポート。

1997 Uniforms and Concrete Walls: Dressing the Village under the New Order in the 1970s and 1980s. In *Outward Appearances: Dressing State and Society in Indonesia.*, Henk Schulte Nordholt (ed.), pp.307-337. Leiden: KITLV Press.

島上 宗子

2001 「ジャワ農村における住民組織のインボリューション—スハルト政権下の『村落開発』の一側面—」『東南アジア研究』38(4): 512-551。

ヴェブレン、ソースティン

1998 『有閑階級の理論：制度の進化に関する経済学的研究』高哲夫訳、ちくま学芸文庫。

Wardhana, Veven Sp. dan Herry Barus

1999 *Para Superkaya Indonesia: Sebuah Dokumentasi Gaya Hidup*. Yogyakarta: Galang Press.

Warren, Carol

1993 *Adat and Dinas: Balinese Communities in the Indonesian State*. New York: Oxford University Press.

Wijaya, I Nyoman

2000 1950s Lifestyles in Denpasar through the Eyes of Short Story Writers. In *To Change Bali: Essays in Honour of I Gusti Ngurah Bagus*, Adrian Vickers and I Nyoman Darma Putra (eds.), pp.113-134. Denpasar: Bali Post.

山下 晋司

1994 「都市の語りとしての大衆音楽—インドネシアにおける音楽・社会・国家」、『国民文化が生れる時：アジア・太平洋の現状とその伝統』、関本照夫・船曳建夫(編)、pp.33-66、リプロポート。

Young, Kenneth

1990 Middle Bureaucrats, Middle Peasants, Middle Class?: The Extra-Urban Dimension. In *The Politics of Middle Class Indonesia*, R. Tanter and K. Young (eds.), pp.147-166. Clayton: Center of Southeast Asian Studies Monash University.

<資料>

Desa P., Kecamatan Ubud, Kabupaten Gianyar, Propinsi Bali

1988 *Monografi Desa P. : Desa Swasembada*.

<新聞>

Bali Post. Denpasar: P.T. Bali Post.

Bisnis Bali. Denpasar: P.T. Bali Post.

(2007年2月11日採択決定)